

地域で活躍する人材をどのように育成するか

—高知大学卒業生インタビュー調査 進学時・卒業時の移動に注目した分析—

小島 郷子（高知大学 大学教育創造センター） 塩崎 俊彦（高知大学 大学教育創造センター） 杉田 郁代（高知大学 大学教育創造センター）
木村 治生（ベネッセ教育総合研究所） 松本 留奈（ベネッセ教育総合研究所）

共同研究の趣旨・目的

高知大学では、大学教育再生加速プログラム(テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」)の一環として、「社会で求められる資質・能力に基づいた、大学の人材育成の効果検証」を課題名とするベネッセ教育総合研究所と共同研究を行っている。

共同研究の目的は、高知大学が、地域活性化の中核的拠点として、地域の課題解決に資する人材育成ができていくかについて明らかにするため、高知大学卒業生の就職先における活躍状況(自己評価と職場評価)およびそこで求められる能力、評価について調査を行い、在学中の学修成果と照らし合わせて検証を行うことにある。

平成29年度には、卒業5年目までの卒業生と職場の上司29組に対して、

1. 高知大学卒業生が社会でどのように活躍しているか？
2. 社会での活躍に、高知大学の教育はどれくらい貢献できているか？

についてインタビュー調査を実施した。

調査にあたっては、高知県に就職した卒業生と首都圏に就職した卒業生を対象としたが、これは、高知県と首都圏では、採用基準や人材育成の考え方について相違があるとの想定による。この点についても明らかにすることで、地域人材育成のための知見が得られるものと考えている。

なお、本共同研究では、今後、インタビュー調査から得られた仮説について量的調査を行い、大学教育のどのような場面が、卒業生の社会に出てからの活躍に寄与しているのかを明らかにしていく。この過程で得られた知見は、大学教育の改善にフィードバックされ、出口の側から見た大学教育の質保証の一翼を担うものとなる。

調査の対象と調査フロー

調査対象

卒業後1～5年目までの、県内および首都圏就職者と職場の方(上司)のペア 29組

●首都圏 就職者 10名

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内		3	1
	県外	1	1	1
理系	県内			
	県外	1	2	

●高知県内 就職者 19名

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内	2	2	4
	県外	2	2	2
理系	県内	2	1	
	県外	1		1

STEP1:事前アンケート

- 1) 社会で「どれくらい活躍」、大学が「どれくらい貢献」しているのか量的に把握
- 2) 大学時代の活動について把握
- 3) 4年間で振り返り、印象的なエピソードを確認

STEP2:インタビュー

卒業生本人 60分
職場の方(上司) 30分

- 1) 進学・就職を選択と移動の背景を把握
- 2) 社会で「どれくらい活躍」しているのかを質的に把握
- 3) 社会での活躍に大学が「どれくらい貢献」しているのかを質的に把握

インタビュー調査の結果と分析

※ 10+1の力:高知大学が育成しようとする【対課題】【対人】【對自己】にわたる10の能力とそれらを統合し働きかける能力
※ セルフ・アセスメント・シート:上記の能力を学生が自己評価するために開発されたアセスメント・ツール

1. 現在の活躍に貢献していると感じる大学生活の学び・経験

●資料を集めてそれを欲しい順に並べ直す、必要なら図を入れる、ということを経験した。どのような図を作ったらわかりやすいのかというの、自分でやったことがあるので知っていた。通常のレポート課題の経験も役立ったが、卒論は特にまっさらな状態から、自分で何をしたいのか、どういう情報を引っ張ってきたら自分の欲しい答えが出るのか、というのを探るところからであり、それは初めてだったのでより勉強になった。卒論を書き切ったというのは自分の中での誇りになった。(K10文系)

●論理的思考力や自主性は、大学で身についた部分が多いと感じる。大学の中でも相当厳しいゼミに所属していて、色々な指摘を率直に言ってもらえた。今になればあの時の経験や助言が大きかった。卒論のテーマ決めの時から、「そのテーマで卒論を書いたら大したレベルにならない、または行き詰まる」と言われ、先生を納得させるためにいかに論理的に背景や仮説を踏まえてテーマを設定するか、先生に認めてもらうのに1年ぐらいい費やした。(S07文系)

●実験などをする時に、どういことが予想され、どうい結果が生まれるのかを先に考えてから行っていたが、現在の仕事は論理的思考が大切だと思うので、その経験が今後生きてくるのではないかと。(S10理系)

●知識の面では、経営学・経済学のスキルは、営業する上でマーケティングをする必要が出てくるので役立っているのかなと思う。(S09文系)

●専門のゼミでは、「なぜゼミ」というのがあり、ものごとに対して「なぜ、なぜ」と繰り返して考える。そんな感じで、例えば、「どうして介護の仕事をするのか」に対して、大体は「感謝される」「高齢者の役に立つ」などと答えるが、本当は「自分のために」が一番の理由ではないかと、といったことをよく考える方だ。(S04文系)

●教育実習を受けたことは非常に大きな経験だった。「教育実習だから責任がない大学生」ではなく、少しでも子供と接する以上、下手なことではいけない、お手本になるよう行動しなければいけない等制約もあるし、責任が生じる。働きながら生じる責任というのを学生の段階で知ることができた。(K13文系)

●3年生からのゼミ活動で、怒田で農業の手伝いをした。活動にあたっては、教える方も、こちらが元気でハキハキしている方が教えやすいだろうし、販売するにも売れるように役に立てるように、元気な方がいいと思う。(K15文系)

相当の努力をして課題(単位取得や論文作成)をやりとげる厳しさがあつた

学問固有の物の見方や考え方に触れられた

実社会との接点を感じる事ができた

3. 社会から求められる人材像 -高知県と首都圏の相違に注目して-

職場の方に行った事前アンケートのうち、「あなたの職場で10年後活躍するために必要だと思われるものを3つ選んで、番号をお書きください」という設問に対する回答からは、「課題を見出し、他者と協力しながら、解決を進めていく」という、高知県と首都圏に共通する人材像とともに、以下のような両者の相違も見出された。「他者との協力」の示す意味が、高知県では、**同僚的つながり(感謝の気持ちが伝えられる)**であるのに対し、首都圏では**異分子とのつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)**を重視している。このことは、インタビュー調査においても確認されたことで、さらに、高知県では、「**個**」を尊重し、「**自分らしさ**」を発揮して働き、成長することを期待する傾向が強いことに対して、首都圏では、**チームメンバーとしての戦力**となることを期待し、**スキルの習得と競争を勝ち抜き積極性**を求める傾向が強い。

高知:個を尊重して成長

首都圏:チームの一員としての成長

	全体	高知県	首都圏
※優先順位を付けて回答してもらい、1番目=3、2番目=2、3番目=1と点数化して集計			
1 現在身についている仕事力(文章や資料・データなどを採集・整理し、一つひとつの部分を関連づながら全体の構成を理解できる)			
2 ものごとを一面的に理解するのではなく、立場を変えて、その対極の視点からとらえることができる	5	1	4
3 別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけ理解することができる	1		1
4 身のまわり起こっている事柄の中で、誰かから教えられるのではなく、自ら課題を見出すことができる	19	9	10
5 自分で見出した課題について、どのような点に原因があるかを説明できる			
6 課題を解決するにあたって、適切な方法や手順を考えてから取り組むことができる	7	5	2
7 自分の考えや調べたことを図や表にあらわして説明できる			
8 自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる			
9 口頭発表やプレゼンテーションで、聴き手の立場や状況に応じた表現方法を選択できる	2		2
10 他者の言うことを理解したうえで、自分の考えを相手にわかるように伝えることができる	11	2	9
11 事実と意見・感想などを区別・整理して相手に伝えることができる			
12 結論を先に述べるなど、自分の言いたいことをわかりやすく相手に伝える工夫ができる	1		1
13 グループでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもち発言・行動できる	13	5	8
14 グループでの活動で、多岐にわたるメンバーの納得や合意を得る努力をすることができる	5		5
15 グループでの活動で、活動に貢献してくれた他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる	12	11	1
16 ものごとを取り組む時、いつまでに何をやるかを具体的に決めて実行できる	11	9	2
17 はじめてのことや苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる	7	4	3
18 結果が出た時、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる	4	3	1
19 情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる	4	4	
20 情報を発信したりデータを作成する際、その内容やデータの活用方法に責任を持つことができる			
21 自らが直面した課題について、それまでに学んだ知識や技能と関連づけて説明できる	2	2	
22 ある考え方や方法で結果が出せないとき、別の考え方や方法でやってみることを繰り返し試みることができる	8	7	1
23 異なる立場や考えを持つ人々と協力関係を築いて物事を進めることができる	28	16	12
24 予想外のことや困難な状況に出会っても、周囲と協力するなどして、適切に対応できる	22	19	3

4. 卒業生が感じた高知大学・高知県の魅力

▶ 卒業生は、高知大学の「**県外出身者8割**」の環境を大きな魅力として評価している。
・県内就職者・県外就職者に関わらず、卒業生からは「学生の8割が県外出身者であり、多様な人と出会える・日本全国の人と友達になれるネットワークができること」は高知大学の大きな魅力と捉えられている。
・全国各地から集まった多様なバックグラウンド・価値観を持つ学生と出会えたことは、**自分自身の視野を広げ、挑戦意欲を刺激し、成長させてくれたとの実感が強く、社会に出てからのより多様な人とのコミュニケーションが必要とされる環境でも役立つ**と評価されている。

▶ 高知県人の「**開放的**」な気質が、**県外出身者の「高知県への愛着」**を育んでいる。
・特に県外出身者は、「アルバイト先の店長や常連さんに可愛がってもらった」「地域イベントに参加した時、地元の方に親切に声をかけてもらった」「ゼミで限界集落を訪れた際、よくしてもらった」等の経験を通し、高知県人の開放的な気質を「高知の魅力」と感じている。
・首都圏就職者でも、「いずれは高知に帰りたい」「高知に戻ってもよい」「高知になんらかの形で貢献したい」といった意識を持つ卒業生は多く、**在学中の高知県人との関わりがこうした意識形成に大きく影響している**。

5. インタビュー結果から想定される仮説

- ① 大学の正課を通じて学んだ専門的知見や学修のプロセスにおける経験は、卒業後のキャリア形成にも重要な役割を果たしている。
- ② 「県外出身者8割」という環境は学生のコミュニケーション力、協働実践力などを育成する上で一定の役割を果たしている。
- ③ 高知県の自然や風土、高知県人の気質などが、特に県外出身学生の学びに寄与している。
- ④ 高知県と首都圏では、卒業生に期待することが異なっており、企業・卒業生が大学教育に期待することにも違いがある。
- ⑤ 教員の情緒的サポートは、学修成果の質の向上と学生の諸能力の育成に貢献している。(別に実施した卒業生アンケートでは、卒業生の満足度と教員の情緒的サポートに中程度の相関が見られた。インタビュー調査でもこの相関を裏付けるコメントがあり、①の正課の場面の教員の指導などと合わせて、検証すべき観点である)

6. 仮説の検証から大学教育の強化・改善に向けて

本研究は、上記の仮説を量的調査(卒業生とその就職先へのアンケート)によって検証し、その結果を大学教育にフィードバックすることで、卒業後のキャリアを見据えた教育改善を企図している。このことは、大学から社会への接続という観点からの教育の質保証に寄与するものである。

評価ポイント

●元々専門的な勉強をしている者もいれば全くそうではない者も色々なメンバーがいる中で、卒業生は今まで勉強していなかった側で周りから教わることも多かった。そんな中で**自分は教わっている**と周りに配慮しながらやっていることはよくわかった。

●基幹システムを入れ替えていただくためには、直近の売り上げに繋がらなくてもお客様を継続的にフォローしていく必要がある。卒業生はそういったことを**チームとしてどうしていけばいいのかを継続的に考えられる能力がある**。

●スロースターターで初めの頃はうまくいかなかったこともあったと思うが、それに対してちゃんと受け止めて、**どうしたらいいのかをしっかりと振り返って考えてきたから、成長してきたのではないかと**思う。

課題ポイント

●今やっていることがいろんなところに関連するということがまだわからない部分があるのではないかと。会社に入って「初めてのことがばか」と感じているようだが、実際はそうではなく身近にあるものなので、その紐付けができるとうい。**業務だけではなく、もう少し社会全体を俯瞰的に見られるとうい**。

●ある情報やデータについて「正しいです」と言えるかという、**裏付けがないので言うことができない**。もう1年2年経験を積みばしっかりできると思っている。

●自分の考え・思考を相手に理解していただく、伝えるということが課題になると思う。なぜその機能が必要かを相手に納得してもらえない伝え方、相手の共感を得て承認を得る伝え方が今後必要になると思う。

チームで協働する

振り返り次につなげる

全体を俯瞰する

エビデンスを持つ

相手を動かすコミュニケーション